



水城の構造 —土塁・外濠・木樋—

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 大宰府の防衛施設・水城

日本書紀によれば、「筑紫に大堤を築きて水を貯えしむ。名を水城という。」とあり、天智天皇3年(664)に水城が築かれたことが分ります。百済の救済を目的とした、朝鮮半島における白村江の戦い(663)に敗れた当時の日本によって、大宰府を中心とする防衛施設として大野城や基肆城と共に造られました。

水城は、福岡平野から筑紫平野へ抜ける際、平野が最も狭くなる場所を遮断した、長さ約1.2kmの土塁です。土塁の基底部の幅は約80mあり、残りの良いところで基底部からの高さは約8m程度です。また、発掘調査によって博多側に約60mの外濠が、太宰府側に内濠があったことが分っています。さらに土塁の東西には門があり、特に西門は博多湾岸に置かれた筑紫館より延びる官道が通っていたことが、周辺の調査でも確認されています。また、水城大堤の西側には、丘陵の谷部を塞いだ小水城と呼ばれる土塁が大野城市・春日市で幾つか確認されています。特別史跡水城跡は、福岡県太宰府・大野城・春日市とに所在する大堤と小水城とを併せて呼んでいます。

2 水城の構造

古代の防衛施設・水城の構造については、九州歴史資料館や太宰府市・大野城市・春日市の発掘調査によって明らかにされています。ここでは、水城の構造を考える上で特に重要な、土塁と濠について見てみたいと思います。

1) 土塁

水城の土塁は断面で見ると、上下二つに分かれていることが分ります。これを下成土塁、上成土塁と呼んでおり、発掘調査ではそれぞれ土塁の積土が異なることが確認されています。沖積地に築かれた水城の下成土塁は、厚さ30cm程度の間隔で積み重ねられています。そして下層には、軟弱な地盤を補強するために敷粗朶とよばれる樹木を敷き詰めていることも確認されています。これは、朝鮮半島の百済の起源とされる古代の土木技術です。これに対して、上層の上成土塁は、粘質土や真砂土を厚さ10cm程度で固くたたきしめています。調査では突き固めた棒の痕跡も確認されています。



水城跡全景



西門地区土塁



敷粗朶

2) 外濠

「水を貯えしむ」と言われた水城の貯水機能は、古くより議論されてきました。長大な土塁については、敵の進入を塞ぐ城壁と見る考え以外に、背後に水を貯えるダムとする考えがありました。発掘調査では、土塁前面となる博多湾側に幅約 60 m、深さ約 4.5 m の外濠が確認され、論争は一応の決着をみました。そして、土塁に埋設された木樋と呼ばれる導水管によって、内濠から外濠に水を注ぎ込んだと考えられています。ただし、中央を流れる御笠川に向かって地形がおちていくことから、外濠にも「柵田」のように段々に水を貯める構造が想定されていますが、調査では確認できておらず、まだ謎の部分も多いのです。



外濠の堆積

3 水城の木樋

1) 木樋

水城の濠に水を貯める導水管の役割を果たしたのが木樋です。下成土塁の幅約 80 m に亘って埋設されていることが発掘調査で確認されています。木樋は、幅 70cm、厚さ 26cm の板状に加工した底板材を 2 枚つないで鉄製の錠で留めています。そして、高さ 80cm の側板を左右に建て、箱形にしています。その上に、幅 40cm 程度の板状の木蓋をして埋めていたようです。現在までのところ、水城のように大きな板材を錠でつないだ木樋は確認されていません。展示室では、この木樋の底板の半分を展示しています。



木樋調査風景

2) 伝世した木樋

現在、展示している木樋の板材は、観世音寺に伝来していたうちの一つです。発掘調査で確認された木樋と構造も変わらず、錠の痕跡も見られます。ところで、この木樋はどのようにして発見されたのでしょうか。過去の記録を振り返ると、福岡藩の儒者、貝原益軒が編纂した『筑前国続風土記』の「御笠郡水城」中には、元禄年間に「大なる木」を掘り出したとあります。観世音寺に伝えられた木樋はこの時に掘り出されたものと考えられています。

(学芸調査室 杉原敏之)



観世音寺伝来の木樋



編集 発行：平成23年2月1日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>